爆弾を抱えた十日間

皆川太郎
上高田一丁目

私は、一九四四年（昭和十九年）二月虎部隊（羅南第十九師団）の自動車部隊に入隊しました。一年半位続けて教育を受けていたので、その年の十一月、虎兵団フィリピン派遣の大動員があったとき、朝鮮に残ることになりました。

十一月末日深夜、部隊は営門を出て行きました。南方行きを秘匿するためか、全員夏服の上に防寒外套・防寒帽で体いっぱいに装具をつけ、白い包帯を巻き付けた小銃を背負い四列縦隊で見送りに立つ私の前を通り過ぎます。私に私物一包を託した小林軍曹もいます。私に戦争に反対している人々がいることを教えてくれ、入隊以来要注意者とされていた朝鮮人学徒兵の新井一等兵もひときわ目立つ長身を、かがめるようにして歩いていました。非常によく面倒をみてくれた小柳兵長が、いつもの少し足を引きずるような歩き方で行きました。私と一緒に入った仲間はほとんど全員隊列の中です。あの時の光景は生涯忘れないと思います。

虎兵団は、昭和二〇年一月から六月頃までルソン島で米軍と戦い壊滅したと「傷痕ルソンの軍靴」（著者　佐藤喜徳）に書いてあります。大勢の先輩友人を失いました。

ルソンに限らず、戦地で亡くなった方々や苦労を重ねて復員した方々に比べれば、私の体験は微々たるものかも知れません。しかし私は、シベリヤ抑留四年を加え約六年間家を離れていました。その家も東京の空襲で焼けました。戦争の発端の満州事変が起きた時、私は小学校二年生でしたから、戦争とともに成長したようなもので、戦争の影響を色々な形で受けました。思えば長い戦争体験だったのは確かです。

軍隊の一期の検閲までの生活はひどいものでした。関東軍が南方へ続々と移動しているとき、対ソ連用として現役四年兵まで温存された部隊です。十分すぎるほどブン殴られ、突き上げられて過ごしました。

山本薩夫監督の映画「真空地帯」に似たようなことがよく出ています。今はビデオになり手に入り易くなりました。再び繰り返されないよう大勢の人に見てもらいたいものです。

演習で敵戦車を爆弾（戦車地雷とも、破甲爆弾ともいっていました）で破壊する動作をやりました。私達が「あんパン」と呼んでいた、大きなあんパンのような工場生産の爆弾に長い棒をつけ、戦車の下に突っ込んだり、長い紐を二本つけ、両側から引き合い戦車のキャタピラの下に入れたり、爆弾に磁石をつけ、戦車の鋼板にくっつけたりの訓練です。タコツボという穴の中から飛び出してやります。こんな爆弾も実際にはなくなってしまい、手製の爆弾を戦車に放り投げ、頭を戦車の反対に向けて身を伏せる練習に変わりました。私は爆弾の専門ではないのですが、爆発は瞬時の火薬の燃焼による火力・圧力で物を破壊する位のことは知っていました。花火を見ても分かるように、燃焼は四方八方に拡がるわけですから、死角の出来るのが信じられなくて、爆発すれば、こちらも死んでしまうと思い続けていました。

ソ連軍との戦争を想定しながら訓練が続きました。部隊長か誰かから、はっきりと「我が軍に砲がなくなった。お前達が砲弾となり、爆弾を抱えて敵陣に飛び込め」と命令されました。

爆弾は三〇センチ位の箱に黄色火薬を詰め、鉛筆を半分に折ったような雷管を入れ、雷管の紐を箱の外に出した簡単なものでした。紐を引くと爆発します。雷管だけでも威力があり、いじっていて指を飛ばした者もいました。

昭和二〇年八月八日、ソ連が対日宣戦布告し、九日早朝から進撃すると発表したそうです。私達は何も知りませんでした。

私は当時、満州（中国東北部）図們から出張で羅南の隣町鏡城にある赤レンガ建ての兵舎にいて、新設師団の兵器受領の書類作りをしていました。書類にある見たこともない「一〇〇式自動小銃」とか、水陸両用自動車とかをどんなものかと想像しながら、どちらかというと呑気な仕事をしていました。

九日の早朝、何かの気配で町に出てみました。「八月九日ソ連軍侵攻!!」と大きなビラが電柱や橋に貼られています。朝でもかなり暑いのに体が小刻みに震えるようでした。橋のたもとに日本人の男が集まっていました。半袖シャツに白鉢巻、日本刀を腰に落し差しです。ソ連軍よりも朝鮮の人達の決起を恐れているのでしょう。

部隊の大部分は満州図們付近の山で陣地構築をしていました。「陣地が完成する頃までソ連は攻めて来ないだろう」位に思っていたところです。新聞もラジオもない生活が続いていました。世界情勢など何も分かりませんでした。

兵舎に戻ると兵士が右往左往し、まるでこの世の終わりのような顔つきです。早くも、近くの海岸にソ連軍接近の情報が入りました。朝鮮軍所属の兵隊が武装して海岸に向かいました。被服庫が開かれ、新品の服や靴に取り替えるため大勢が殺到していました。私は忙しくて何も取り替えることが出来ず、後でシベリヤまで歩かされたとき、靴底が口をあけ非常に苦労して

しまいました。

図們の本隊に合流することになり、軍用トラック十数台を整備し、代用燃料をガソリンに切り替え、夜の闇にまぎれ無灯火で出発しました。激しい雨でした。私は修理車に乗りました。荷台に幌がかかり、旋盤、ボール盤や発電機、コンプレッサ等を積んだトラックです。運転はベテランの召集兵でした。走行中外れた点火栓の番号を間違いなく当てます。運転台に二人分の爆弾を置きました。車がひどく振動するので、爆発しないかと気が気ではありません。

山の中で空襲に会ったり、火の海の町を走り抜けたりで、次の夜図們に着きました。灯火管制で真っ暗です。街の様子は数か月前とすっかり変わり、「まるで戦場のよう」がぴったりでした。「敵戦車六〇〇台がこちらに来る」デマか本当かそんな噂が流れていました。気のせいか轟音が聞こえるようでした。街の外側をソ連軍のトラック部隊が疾走して行きます。別な戦線に向かうのでしょう。「街の中にもう日本軍はいなくなった」との情報もありました。

不安な夜が明けると、ソ連軍の砲撃が続き、着弾が身近に迫って来ます。本隊と連絡がとれないまま私達は西に移動し、河原の広い場所に陣地を造りました。何日かここで過ごしました。夜になると爆弾を背負った兵隊が出て行き、戻りませんでした。戦車攻撃です。いつ、自分の番になるか、夜が恐ろしい数日でした。

やがて部隊長と連絡がとれ、何をしていいか分からない状態ではなくなりました。

突然、ソ連軍騎兵の一団が襲って来ました。馬も、人間も大きくて鬼のような感じでした。偵察に来たのかすぐ引き揚げて行きました。

隣の男と冗談を言い合いました。

「戦車でなくて良かった。馬に爆弾投げるのやらなかったよな」

やがて、停戦命令が出ました。これにも驚きました。「なぜだ」「どうしたんだ」「どうなるんだ」詳しい情報を待ち遠しく思いました。八月の十七日か十八日頃のことです。

武装解除ということになり、図們に戻りました。途中、ソ連軍の旧型と思える角張った戦車が何台も破壊されていました。日本兵の遺体もそのままです。爆発の威力を初めて見た思いです。

トラックを引き渡すとき、とっさに何を考えていたか忘れましたが、十日ほど持ち運んだ爆弾を運転台に固定し、雷管の紐を扉内側の把手に縛りつけ、外から扉を開けると爆発するしかけをして車を離れました。しばらく爆発音を気にしていましたが、移動するまで爆発はしなかったようです。敵もさるもの、同じ手口が沢山あって馴れたものだったのでしょうか。

ここで、すべての兵器を投げ出し、四年も続いた捕虜生活が始まりました。

満州の広野をシベリヤまで徒歩行軍し、シベリヤでは貨物列車やトラックを乗り継ぎ、ハバロフスク、コムソモリスクを通過して、フルムリという捕虜収容所に落ち着いたのが十一月三日の夜でした。

一九九〇年、フルムリを訪れましたが、収容所はすべて地上から消え、四〇年前、昼なお暗い密林だったところが伐採し尽くされて当時の面影を見ることは出来ませんでした。

それより少し以前、フィリピンの慰霊の旅にも参加し、虎兵団の足跡をかいま見て来ました。バギオ辺りの松林は、北朝鮮の風景に実によく似ていました。戦争をしながら死んだ人達は、どんな思いであの風景を見ていたのだろうと、胸のつまる思いでした。

戦場は生命の危険は当然のことながら、寒さ暑さの防ぎようもなく、飢えと睡眠不足に悩まされ、不潔極まる生活を強いられます。

しかも戦争は、戦場で戦争のプロが殺し合うだけでなく、広島・長崎、あるいは空襲で焼き払われた数多くの都市のように、戦争中言われた前線も銃後も区別がなくなり、国民全員死にさらされます。

さらに海外進出企業防衛とか、海外在住の自国民救出が軍隊の役割りとか言いますが、満州の開拓団が見殺しにされた例もあり、全く信用出来ません。

流血により兵器産業が甘い汁を吸うだけでなく、武器以外の物資の消耗も激しくなります。ここにも笑いの止まらない部類が発生します。

自分自身の体験から、血を流すだけで何の得もない大多数の人達の側に立って、「戦争をなくす」夢のようなことに力を尽くしたいと思います。平和と自由のために!!